

池田草庵先生に学ぶ会・令和七年（二〇二五）九月

祭_ニ姪盛_一文（池田草庵著作集P249～p251）

祭_ニ姪盛_一文（二）

十月四日

（担当・守本、北見、高木、宮崎、西村、

池田、藤原、俊彦、左起子）

十月四日

而致_レ有_レ然歟、則我哭_レ汝之所_ニ以不_レ若_ニ汝父之
哀_ニ者、乃還以見_ニ我之愛_レ汝之深_ニ耳、

読み

而して然有り致すや、則ち我れ汝を哭するはこれ汝の父の哀しむに若
かざる所以^{ゆえん}なり、乃ち還えりて以って我の汝を愛するの深きを見るの
み

言葉

然有_ニサアリ　そうである　そのとおりだ

歟_ニカ　文末につけて疑問・反語の強調

哭_ニコク　人の死を哀しみ痛んで泣く　若_ニシク　及ぶ所である

訳

そして、そうだすることがあるならば、私が、おまえについて泣くこ
とは、父の哀しみには及ばない、ふり返って見て、私が深くおまえを
愛していたことの深さを示すだけだ。

今也執_ニ汝之遺文_一、反覆諦観、

呻吟諷詠、乃知汝之志氣、固足_ニ以自振拔_ニ矣、

読み

今なり、汝の遺文を執り、反覆諦観、呻吟諷詠、乃ち知る汝の志氣
を、固より以って自から振拔に足るかな、

言葉

諦観_ニテイカン　物事をよく見る　呻吟_ニシンギン　苦しみうなる

諷詠_ニフウエイ　詩歌に節をつけて詠う

志気〓物事をしようとする気持ち。また、その意気込み
振拔〓ふるい越す

訳

今こそ、お前の残した文章を手にとってみて、何度も見て、声を出して読み、そして、おまえの志と気概を知り、もとより、以て自らを、奮い起こすのに十分だ

而汝之才力亦足〓以酬〓其志〓矣、天若假〓之歲月、
而裁〓抑之、激〓昂之、使〓以尽〓其指導之方、

読み

而して汝の才力亦以て其の志に酬いるに足るなり、天若し之の歳月を假し、而して抑えて之を裁き、昂げて之を激し、以って其の指導の方を盡さしむ

言葉

酬〓むくいる 若〓モシ もし…ならば

抑〓ヨク 抑える 昂〓アガル アゲル

抑昂

裁〓たつ きる さばく

訳

そして、お前の才力もまた、お前の志に酬いるのに十分であった。天がもしお前に歳月を貸し与えてくれるなら、感情を抑えてお前を評価し、お前の気持ちが高まるようはげまそう。そのように、指導方法を尽すだろう。

則未〓必不〓可〓成〓遠大之業〓也、

況方〓其困苦危迫之際、從容整頓、尤見〓平生用〓心之所〓在、
読み

則ち未だ必しも遠大の業を成すべからずなり、
況んや其の困苦危迫の際に^{あたり}方て、從容整頓、尤も平生心を用いるの在る所を見る、

言葉

況〓況 いわんや

方〓あたりて

尤〓もつとも

従容^ニシヨウヨウ　ゆつたりと落ち着いてくつろぐさま。

訳

則ちまだ必しも遠大の業を成しているとは言えない、
まして其の困苦が迫る最中であればなおさらだ。

ている所を見る。

心を用い

病革命^ニ侍者、更移^ニ席於室之中央、拭^レ面櫛^レ髪、
飭^ニ其衣衾、喻^レ父以道、謝^レ母以恩、

読み

病い革らたまわりて侍者に命じて、更に席を室の中央に移す、
面を拭き、髪を櫛けずり、その衣衾^{いきん}　飭^{ととの}える、父に喻とすは道を
以つて、母に謝するは恩を以てする、

言葉

革^ニあらたまる、今までと違った状態になる　櫛^ニくしけずる

衣衾^ニイキン　衣服と夜具

飭^ニキン　ととのえる　　喻^ニさとす

訳

危篤状態になったとき、侍者に命じて、更に席を室の中央に移動し、
顔を拭き髪を櫛き、寝間着や床を整え、父には道を理解してもらい、
母には感謝を恩で返し、

戒^レ弟以^ニ嗣続、勉^ニ朋友以^レ、而又自悲^ニ其志未^レ及^レ成而夭^ニ也、
而又深憾^レ不^レ能^レ報我之教育之厚^ニ、

読み

弟を戒しめにするは、嗣続を以てし、朋友を勉^はげますは学を以つてす、
而し又、自らは其の志未だ成る及ばずして夭するを哀しむなり、
而して又深く我の教育の厚きに報いる能わざるを憾む、

言葉

嗣続^ニ承継　うけつぐ　夭^ニ若い　若死にする　憾^ニうらむ　残
念に思う　憾^ニ心残りに思う

訳

弟には、跡を継がせることを戒め、友人には学問に努めるように励まし、そして、また自分の志が未だ成就せずに若死にすることを悲しんだ。また、私の教育の手厚かったこと報いることのできなかったことを心残りとした。

聞者皆痛哭流涕仆地、而意氣夷然如不視聽、

次而禁婦女毋復近、瞑目合口、姑且就睡、既而奄然而逝矣、

読み

聞く者皆痛哭流涕地に仆す、而して意氣は夷然として視聴せざる如し、

次に婦女を禁じ復た近つかせず、瞑目合口、姑且睡りに就く、既に
して奄然として逝くかな

言葉

痛哭Ⅱツウコク 激しくなく 流涕Ⅱりゆうてい 涙を流す

仆Ⅱボク たおれる 夷然Ⅱイゼン 落ち着いていて平気な様 母

Ⅱなかれ なし 瞑目Ⅱメイモク 目を閉じる

夷然Ⅱイゼン 落ち着いていて平気な様

合口Ⅱゴウコウ 口をすぼめる

姑且Ⅱコシヨ とりあえず しばらく 既而Ⅱやがて まもなく

奄然Ⅱエンゼン ふと にわかに

訳

聞いた者はみな泣き叫び涙を流して、地に倒れ伏す。気持ちには損ない
見ること聞くことができないほどだ。

次には、婦女を側に寄せないで、また、近づけず。目を閉じ、口を
合わせ、しばらく眠る。まもなくにわかに逝ってしまった。

嗟乎如此操守、如此力量、何為不成、何欲不遂、

低回追惟、嘆惜痛恨、蓋今而後、益覺汝之不_レ易_レ獲也、

読み

ああ此の如くの操守、此の如く力量、何すれぞ成らず、何を欲しても
遂げられず、

低回追惟、嘆惜痛恨、蓋今而後、益汝の獲易からずを覚えるなり。

言葉

操守Ⅱソウシュ 志を固く守る 力量Ⅱはたらき 腕前
何為Ⅱなんすれぞ どうして なぜ
低回Ⅱテイカイ さまよう 歩き回る
追惟Ⅱ過去を思い起こす 嘆惜Ⅱタンセキ 嘆き惜しむこと

訳

ああこのように志を固く守り、このように力を尽くす、どうして成すことができないのか、望むことが、やり遂げられないのか、
思いに沈みながら、行きつ戻りつして、過ぎ去ったことをあれこれ考える。そこらを歩きながら思い起こし、嘆き悲しむ、今から後、
お前を簡単に得ることができないことに気づくのである。

然九原不_レ可_二復起_一◇ 聲音笑貌不_レ可_二復見_一、

寒夜風窓、孤燈寂寞、憂_二読書之無_レ伴

読み

然るに九原は復起きるべからず、聲音笑貌復見るべからず、
一、寒夜風窓、孤燈寂寞、読書の伴無きを憂う、

言葉

然Ⅱしかるに 九原Ⅱキュウゲン 墓地 あの世界
寂寞Ⅱセキバク ひっそりしてもものさびしいさま
憂Ⅱウレウ つらい 悲しい

訳

しかしながら、あの黄泉の世界はまた動き出すわけはなく、お前の
話す声や笑う姿は、また見聞きできるものではない。風が窓をたた
く寒い夜、一人さびしく灯りをとます。一緒に読書する友がいない
ことを悲しく思う。

池田草庵先生に学ぶ会・令和七年(二〇二五)九月

祭_ニ姪盛_一文(池田草庵著作集P249～p251)

祭_ニ姪盛_一文(三)

十一月一日、

十一月一日

而慮_ニ老後之無_レ託、耿々不_レ寝、
毎以達_レ旦、嗟乎汝乃知_ニ我此恨_一耶、

読み

而かるに老後之託す無しを慮_{おもんばか}る、耿々_{こうこう}として寝られず、
毎に以つて旦に達す、嗟乎汝乃ち我の此の恨みを知るや、

言葉

耿々_ニコウコウ 光が明るくやくさま輝く様

毎_ニ

旦

孤燈_ニただ一つポツンとともっているとしび

斂_ニケン ものほしそうにする 塋_ニエイ 墓

訳

そして老後を託すのがないことが不安になる。こうこうとして、眠られず。いつも、朝になってしまふ。ああ、お前は私のこの恨みを知るかな

今我既斂_ニ汝之屍_一撫_ニ汝之棺_一、
遂舉葬_ニ汝於祖塋之側_一、

読み

今我れ既ち汝之屍を斂し、汝之棺を撫ぜる、
一、遂挙げて汝を祖塋之側に葬る

言葉

訳

今私はお前の屍を物欲しそうにしている。お前の棺をなせている。遂には、挙げてお前を先祖のお墓の側に葬る。と

而將待 来春、建^二一片碑^一、以記^中汝之平生^上也、
而若^二其遺文^一、則他日擇^二稍佳者^一、

読み

而して將に来春を待つて一の碑を 以つて汝の
平生を知るさんとするなり

而して其の遺文のごときは、一、則ち他日稍佳者の両三篇を、擇ぶ

言葉

將^二まさにならんとする 若^二ゴトキ 稍^二シヨウ ヤヤ

訳

そして、来年の春を待つて一つの碑を建て、お前の平生を記そう。
そして、その遺文は別の日に良いものを二、三編選ぼう。

將^下 附^二我集後^一、傳諸後人^上、

苟吾而不^レ朽（？）則汝亦與有^レ榮、

読み

將に以て我集の後に付け、一、諸々の後人に傳えんとす、
苟くも吾れ朽ちざれば、則ち汝も亦與みし榮有り、

言葉

與^二くみする

訳

私の全集の後に付けて、後から来る人に伝えよう
少なくとも、私が朽ちなければお前もそれで榮がある

且不_レ敢忘_二汝之遺囑_一

教_二督汝弟_一使_二善承_二汝之後_一

読み

且敢えて汝の遺囑忘れず、一

督して汝の弟に教え、善しく汝の後を承けつげしむ。

言葉

且_二カツ　かつ　まさに

遺囑_二イシヨク　生前に死後の物事を頼んでおくこと

督_二「みる」「見はる」「ただす」「ひきいる」「うながす」「せ

きたてる」などの意味を持つ

承_二うける　受けつぐ

訳

そして、あえてお前の頼みを忘れず

きちんとお前の弟に教え、よろしくお前のを継がせる。

而我亦將_レ代_二汝之身_一、率_二汝弟_一、奉_二汝父之歎_一

而父子兄弟、親厚和睦、不_レ敢隕_二其家聲_一、以慰_二汝地下之靈_一、

読み

而して我れ亦將に汝の身に代わつて、汝の弟を率いて、汝の父の歎きに奉り、而して父子兄弟、親厚和睦して、其家声を敢えて損なわず、以つて、汝の地下之霊を慰むべし。

言葉

奉り

家聲_二カセイ　家の評判　敢えて_二少しも

訳

私はまた、お前の身に代わつて、お前の弟を率いて、お前の父の哀しみにそつて、父子兄弟、みんな仲よくして、少しも家の評判を損なわず、お前の地下の霊を慰めようとする。

汝其可_二以無_レ憾矣、興_二言至_レ此、

涕零如_レ雨、嗟乎汝有_レ神、尚鑒吾之衷情、嗟乎哀哉。

読み

汝其以つて憾み無かるべきや、言を興し此に至つて、

涕なみだ零雨ふるの如し、嗟乎汝神あらば、なほ吾の

衷情を鑒かがみよ。一、嗟乎哀しいかな。

言葉

憾かなうらみ

涕零なみだふる＝テイレイ 涙をこぼす

鑒かがみ＝かんがみる

訳

お前はそれをもつて思い残すことないだろう。言葉にして、ここにきて、こぼれる涙は、雨のごとし。ああ汝神であるなら、私の悲しい思いを鑑みよ、ああ悲しいかな。